

わが社の

アジア戦略

越で社会貢献からビジネス展開へ

HRインスティテュート【前】

人材育成のHRインスティテュート（HRI、東京都渋谷区）が、社会貢献をきっかけにベトナムでの事業基盤を築いている。もともと純粋なボランティア活動として現地に小学校を建設したことが始まりだったが、現在では企業向けのコンサルティングや研修プログラムなどを手がけ、ビジネス展開も広げる。社会貢献とビジネス。いずれも企業理念の「主体性を挽き出す」ことが目的で、共感する人々のネットワークが事業の相乗効果につながっている。

2004年から中部地域で学校建設の支援を始めた。同国は比較的整った教育制度がある一方で、校舎のようなインフラはまだ不十分。生徒数に対して教室が不足するため午前午後の入替制で授業をしなければならず、机イスなどの備品を含めて傷みが激しいケースも少なくない。特に中部地域は、ハノイのある北部やホーチミンのある南部に比べて貧しく、ベトナム戦争の傷跡も深かった。街中を離れた山間部などは、のどかな風景とは裏腹に教育環境は非常に厳しい状況だ。

なぜベトナムで社会貢献を始めたのか。HRIは1993年の創業時から「シェアリング」というコンセプトを掲げており、経営が安定して利益が積みあがったら社会に還元していくことを目指している。営利企業として得たものを、社会活動によって持たざる人た

ちと共有しようというもので、創業後間もなくから社会活動を活発化させてきた。

また日本では、個人のキャリアアップや組織・社会への貢献などについて考える場「ビジョンハウス」を設けて、研修や講座を開催しており、同様の場を海外にも作りたいと考えた。ベトナムは日本人と気質・性格が近いだけでなく、日本にもゆかりがある親日国。社内でも最も興味が高かったことから同国での展開を決めた。ただ、日本のビジョンハウスが大人を対象としているのに対し、ベトナムでは対象を子供として、学び舎をビジョンハウスと位置づけた。

7校の校舎を整備

初めて校舎を建設したのはクアンナム省クエロック地区。中心都市のダナン市からは、未舗装の道を自動車に揺られながら2時間ほどかかり、周りは山々に囲まれた盆地だ。当時からベトナム事業をまとめる三坂健チーフコンサルタントは、「初めて現地を訪問した際は先生や生徒が総出で出迎えてくれた。温かな歓迎や素朴な姿勢に感銘を受けた」と言い、現地からの期待も相当高かったようだ。この後、小学校や中学校、保育園の合わせて7校の校舎を整備していった。

これをきっかけに地元との関係を強め、政府高官などとのネットワークができたことが後のビジネス展開につながる。ただ三坂氏によると、「お金目的ではなく純粋な社会活動だったからこそ、考え方に賛同してくれる人々が集まった。それが今のビジネスの大きな支えになった」としている。（つづく、M）



世界遺産の街ホイアンでは日本語教室も開設